戦後のリーダー Developers 2

戦後のカイロプラクティック

Chiropractic Leaders : Post-World War II in Japan

戦後のカイロプラクティック界のリーダーが全員ＤＣでなく、日本で技術を学んだ生え抜きの人々であったことは特筆に値しよう。戦争をはさんで、外来語は使用されない時代が続いたが、なお「カイロプラクティック」を一貫して標榜、その発展に骨身を惜しまなかった戦後のリーダーたち。特に松本茂、伊藤緑光、竹谷内米雄の３氏は当時カイロ界の三羽烏といわれた。

真面目な松本茂氏は戦前より「カイロの普及」のため全国でカイロの技術指導を行ない、千名近くの技術者を育てた。自由奔放な伊藤緑光氏は政界・財界関係で多くの有名人を治療しカイロの普及に貢献。またペンの達人で国際感覚の優れた竹谷内米雄氏は世界のカイロ情報を収集、海外からカイロ権威者を招いたり、留学生に道を拓いた。戦後のカイロようらん期にあって彼ら３人は、それぞれの得意な分野でカイロの発展に大いに貢献した。

右の写真は竹谷内米雄氏が主宰した1953年（昭和28年）のカイロデー開催当日、明治神宮で伊藤緑光、竹谷内米雄氏の打ち合わせ中の写真。松本茂氏は戦前の1929年（昭和４年）、大澤、小平ＤＣと初のカイロデーを開催。戦後は、1950年（昭和25年）より毎年続けている。

1953

左から、竹谷内米雄氏、伊藤緑光氏
From Lt to Rt : Yoneo Takeyachi and Ryotuko Itoh

戦後50年、日本のカイロプラクティックの歩み

敗戦と占領政策は戦前の届出カイロプラクティック営業を無効にしただけでなく禁止した。従って戦後カイロプラクティックの第１歩は、営業の法的根拠を求める戦いから始まった。その中心は1947年（昭和22年）に設立された全国療術師協会（全療協）であった。カイロプラクティックは医業類似行為（療術行為）の手技療法に分類され、全療協はカイロ、電気、光線、温熱、刺激の制度化を求め国会と行政に働きかけることになる。

しかし禁止法律の撤廃は至難なうえ、あんま・鍼灸団体の反対が熾烈で法制化運動は常に期待倒れだった。とはいえ全療協は５度の法律改正と、1964年には既得権者の終生営業権を獲得した。また1960年（昭和35年）には療術に係る最高裁判決があり、既得権者以外の者でも、有害の恐れのない療術行為の自由開業が保障されるようになった。これは良識ある業者にとって歓迎すべき判決であった。

一方、1970年代後半からアメリカからカイロの講師が頻繁に招聘されカイロの人気が高まったのと、カイロの放任状態を利用してカイロに参入する人が急増し、無秩序なカイロプラクティック普及とその禍根は今日でも残っている。その最大の犠牲者が国民であるのは言うまでもない。欧米諸国では、論議ある案件は国民（住民）投票という民意で決める。

法律とは秩序保持の手段にすぎず、時代や人々のニーズの変化によって改正され、国民全体の健康や安全、福利のために運用されるはずのものである。ところが、戦後政治は「政・官・業の癒着」が象徴するように、政治家が特定の業界や官庁とつながり、業界は自分たちの業権拡大を求めて、票と金で政治家を支援し、政治家は官僚に圧力をかける構図が出来てしまった。日本は政府（官僚）が立法する特殊な国である。だから力（金と票）が大きい業界ほど有利になる。そこには国民のニーズとか、時代の変化が反映されることは少ない。

カイロプラクティックの法制化に反対し、違法行為者として取り締まりを要求する声はかなり強い。自分たちの業を圧迫するというのが本音である。当初、反対団体も行政もカイロプラクティックは自然淘汰されると予測していた。ところが実際は逆であった。

良いものが流行るのは自然であり、それを悪用する人がはびこるのもまた現実である。無秩序を悪用した短期養成コースやカイロによる治療事故が大々的に報道されたため、カイロの反対者はその安全性、有効性、科学的な根拠を指摘するが、多くの人々がカイロ治療を求め、主要先進国がカイロを公認し、外国総合大学にカイロ学部ができ、世界一流研究所がカイロの有効性を認める事実をいつまで黙視できるだろうか。情報化時代は特定の業者エゴが通用しない時代である。

日本式整体、手技に埋没の危機。カイロの復活

There was a Danger for Chiropractic to be Absorbed into Japanese Form of Manipulative Therapies, but it survived

戦前アメリカでカイロプラクティックを学んで帰国した日本人ＤＣは14名を数えるが（12頁参照）、それも大正末期が最後だった。その後1927年から1969年の間アメリカの帰国者は皆無に等しい。正当な継承者がいなかったことは、カイロプラクティックにとって消滅の可能性のある危険な時代を意味した。

昭和初期の混乱から太平洋戦争へと転げ落ちてゆく当時の日本で、庶民にとって海外留学など考えられる時代でなかった。まして「カイロプラクティック」を含め横文字は、敵性語として排除される時代であった。その中で、数少ない帰国ＤＣのうち、大澤昌壽、小平粂重氏だけは講習会を開いて、後進への技術指導に熱心であった。

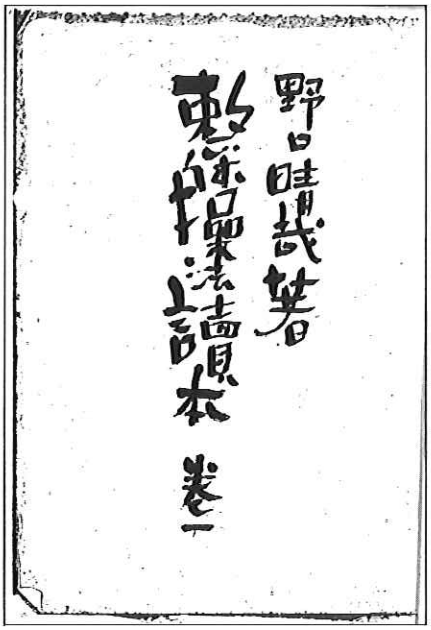
当時の日本の手技療法界では指圧や整体が主流で、カイロプラクティックなどの「舶来の脊椎療法」は普及すればするほど主流派に吸収されていく傾向にあった。大正から昭和にかけて、多くの整体の名人が登場し、手技療法の三大名著と言われる「整体・指圧全集」（平田内蔵吉）、「指圧療法」（玉井天）、「整体医典」（平賀臨）や、操体法の創始者・橋本敬三氏に大きな影響を与えた「正体術矯正法」（高橋雄）などが出版された。これらの書物が指圧・整体の人気に拍車をかけたのは言うまでもない。しかしそれらの多くは、カイロプラクティックの影響を受けるか、あるいはカイロプラクティックを意識して書かれたのは明らかで、昭和４年版の「赤本」（実際的看護の秘訣）の中で築田多吉は「これらの療法はアメリカのカイロプラクティックから派生したものではないか」と指摘している。大正、昭和初期にカイロが低迷した理由として、海外情報が途絶え、また当時カイロプラクティックについてまとまった専門書がほとんどなく、東村英太郎氏が大正15年に翻訳出版した「カイロプラクティック」が唯一であった。同書は好評で戦後昭和40年代まで版を重ね続けた。カイロに関する出版物が少なかったもう一つの理由は、カイロを行なう業者の数が非常に少なかったことが挙げられる。ほとんどの戦前のＤＣが教育に消極的であったためカイロの教育指導者が少なく、わずか習った人でもあえてカイロを名乗らず、日本流に焼き直して自己流の療法を唱える人が多かった。

大正・昭和初期にかけ、カイロプラクティックが日本の整体・手技に埋没する危機は十分にあった。

しかし、カイロプラクティックはそれを信奉する少数の人の手で戦後（昭和中期）へと生きのびる。松本茂、伊藤緑光、竹谷内米雄、山田新一、吉橋績、東村英太郎、また日本人以外の人でカイロプラクティックの普及に貢献した人も忘れられない（15頁参照）。

戦後のカイロプラクティックや療術にとって大きな事件は1960年（昭和35年）の「療術行為に係る最高裁判所の判決」であった。それまで実質的に禁止されていたカイロ・療術行為に対し、最高裁は憲法22条の職業選択の自由を優先させ、患者に害を与えない限り、医業類似行為そのものを処罰することができない、とする判決を下したのである。これを法的な裏づけとするなら、他方1975年頃より多数の日本人ＤＣの帰国とアメリカ人講師の招聘と、セミナーを通じてカイロプラクティックが急速に普及することになった。

（参考資料：マニピュレーション誌№30　わが国カイロプラクティックの歴史）



手技療法の偉才

戦前から戦後にかけ、手技療術界に幾人もの偉才が生れた。野口晴哉氏もその一人である。左の本は昭和22年（1947年）に書かれた氏の講義録だが、簡潔明瞭な文の中に貫かれた手技療術の哲学は、今日でも通用する内容に驚かされる。野口氏は手技療術を整體操法で統一しようと、昭和18年(1943年)カイロ、オステ、スポンデロ、その他の代表者を集め「整體操法制定委員会」を設立したが、時節柄もあり成功しなかった。本書は「日本の混乱した手技療術は大正期に輸入されたカイロ、オステ、スポンデロセラピーによって大変動し、輸入理論によって手技療術は飛躍し、昭和の初め頃迄、精神療法と結合していた技術までが手技療術として、新しい位置を占め、今日の手技療術時代を現出した」と述べ「昭和５、６年頃から今日に至るまで、このアメリカから渡来した３つの療法の影響を受けないものはなかった」と記している。野口氏は戦後、整体協会を主宰し独自の道を歩んだ。

野口晴哉氏
Haruchika Noguchi

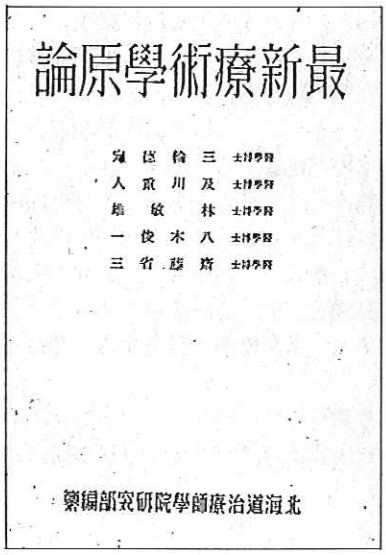
美座式保健術で人気を集める

1930年発行

1931年初版発行

1928年（昭和３年）美座時中氏は東京でカイロプラクティックを基礎にした美座療法を始める。美座療法とは、(1)自然に還れ (2)正しい脊柱に病気なし (3)快食、快眠、快便。(4)健康は富みに勝れり (5)自分の健康は自分で保て、の５原則。自然良能を活性化する保健治病術。政界、財界人など多くの人が治療を求めて集まり活況を呈した。綜合医科学研究所長、国民保健協会会長、日本工業倶楽部会員。1962年没。

美座時中氏
(1952年頃撮影)
Tokinaka Miza
founded MIZA
Physical Therapy



北海道でのカイロ普及に活躍

北海道のカイロプラクティック普及に活躍した人に、吉橋績(いさお）氏がいる。ＪＣＡの現教育委員長・吉橋昌厚ＤＣのご尊父だ。1913年生れ。1932年（昭和７年）に東京理学療法研究所を卒業、1935年に北海道へもどる。当時ジョン・バチーラというイギリス人宣教師がアイヌ救済のため来道、吉橋氏は師からフィジオセラピー、オステオパシー、カイロプラクティックを習う。その後北大医学部の児玉作左衛門教授、北海道治療師会の石原通孝会長らと共に、当時画期的な学術テキスト「最新療術学原論」制作に協力した。1942年以来、北海道治療師学院で講師を勤め、多くの学院卒業生を育てるかたわら北海道治療師会の理事長としても活躍。カイロプラクティック一筋に生きた学研肌の人で、東村英太郎氏、櫻庭豊ＤＣとは長く交際があった。1977年没。

吉橋績氏(1938年撮影)
執筆者の一人で北海道のカイロ普及に大きく貢献

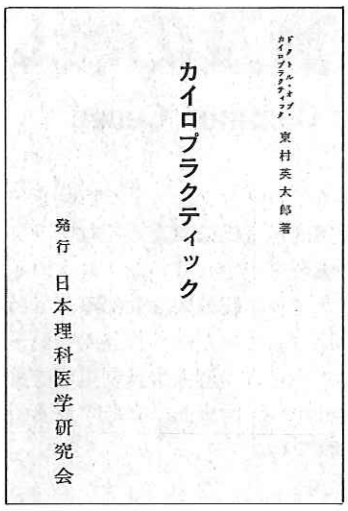
Isao Yoshihashi
(1913-1977)
struggle to promote
chiropractic
in Hokkaido

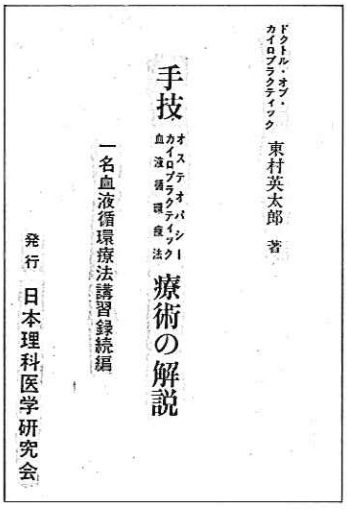
身体均整法の創始

1951年に亀井進氏が創立

亀井進氏は1963年に東京で身体均整協会を創設。均整学は人体の姿勢を12のタイプに分類、それに合った矯正を行なう。病気に触れず体形を整える操法。1970年、亀井氏の高弟、小関勝美氏が身体均整学院を設立、学校教育で均整法普及を始める。亀井氏の均整法の理論と技術は現在、姿勢保健均整専門学校で教えられている。亀井進氏は1975年没。

亀井　進氏
(1965年撮影)
Susumu Kamei
founded Body Balance
Therapy





大阪で数々のカイロ著作

東村英太郎氏は、大正末から戦前、戦後にかけ治療師（療術師の前身）制度化運動の先頭に立った。

自らもドクトル・オブ・カイロプラクティックと称し、カイロに関する本を発行したり、神経分布図を販売するなどカイロの普及に貢献。

戦後は大阪から離れること少なく、専ら著述に専念。長く関西の治療業界やカイロの流布に大きな影響力を持っていた。

東村英太郎氏

Eitaro Higashimura published books on chiropractic in 1950's and 60's

松本茂氏
カイロ入門書発行
1951年

S.Matsumoto's first book on Chiropractic published in 1951

戦前よりカイロプラクティックの技術指導を行なってきた松本茂氏は、それまでの講習テキストをまとめ、初の著書「米国式カイロプラクティック療法入門」を発行。

竹谷内米雄氏
カイロ新聞発行
1966年より

Y.Takeyachi started to publish monthly News "CHIROPRACTIC" since 1966

自らの還暦を機に月刊紙カイロプラクチックを発行。1966年6月号から1974年3月まで継続発行し、健筆をふるった。

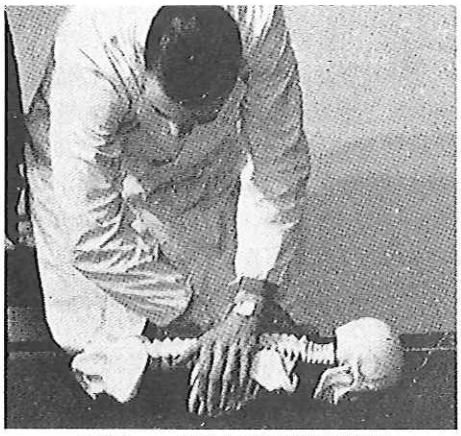
山田新一氏のカイロへの情熱　1953年
東京カイロプラクティック学院開校

Shinichi Yamada Opens Tokyo Chiropractic Institute in 1953

山田新一氏は戦後カイロをアメリカ人のロジャー・アルトＤＣに学び、1953年、東京カイロプラクティック学院を開校。本科２年、研究科４年のコースだった。

東京カイロプラクティック学院開校式(1953年)で左から、小林勝治、保坂岳史、山田新一学院長。1957年に東京都の認可を受けた。

学院長
山田新一氏
1965年撮影



ロジャー・アルトＤＣの実技指導
Demonstration by Roger W. Alt, D.C.

松本茂、竹谷内米雄によるカイロ普及の戦い

Shigeru Matsumoto, Yoneo Takeyachi : Two Rivals Fought for Common Cause

戦後日本のカイロプラクティック発展に貢献をした多くの人々の中で、その信念、キャリア、影響力で抜きんでた二人をご紹介しよう。

松本茂と竹谷内米雄の両雄である。二人は共に業界仲間であり、終生の良きライバルであった。

二人は大きな共通点と違いがあった。

共通点は、共に正規なカイロ教育を受けない日本流カイロプラクターであったこと。東京を活動の拠点としたこと。カイロプラクティック一本に掛けてきたこと。共に全国療術師協会の幹部としてカイロの法制化や業界活動に熱心であったこと。息子をアメリカのカイロ大学に留学させたこと等である。一方、松本茂氏は、日本カイロプラクティック協会を主宰し、竹谷内米雄氏は東京カイロプラクティック協会を主宰していた。日本カイロプラクティック総連盟設立に際しては共に団体協力していたが、竹谷内一愿氏が帰国し、ＪＣＡの個人会員制実現を機会に袂を分かつ。両雄並び立たずだったのかも知れない。

松本　茂
Shigeru Matsumoto
(1897～1992)

長男・松本徳太郎
Tokutaro Matsumoto DC

松本茂氏は明治30年（1897年）生まれ。若い頃の病弱を当時アメリカのカイロ大学を卒業した大澤昌壽氏に治してもらったのが契機で直弟子となる。1929年（昭和４年）開業。戦前から後進の指導に立ち、北海道治療師会の要請で毎夏講習を続け「学院型」と名づける術式を作った。戦後1948年、老齢化による大沢先生の申し出を受け、日本カイロ協会会長に就任。戦後も、北海道を初め全国のカイロ技術普及の先頭に立った。業界では一貫して療術の生存をかけた闘争に協力、全療協の理事長としてカイロ法制化に最後まで尽力した。長男の徳太郎氏は1973年にロサンゼルス・カイロ大学を卒業。現在はご尊父の後を継ぎ、日本カイロ協会会長と全療協の役員を勤めている。

竹谷内米雄
Yoneo Tekeyachi
(1907～1975)

治療中の竹谷内米雄氏
Yoneo Takeyachi at adjustment

カイロプラクティックの技術普及に生涯をかけた松本茂氏に対し、竹谷内米雄氏ははにかみやで、業者への技術披露を好まなかった。しかし、天性の技術と誠実な人柄に政界、財界、芸能、スポーツ界から多くの人々が治療を求めて集まってきた。

特にペンの達人で還暦を記念にカイロプラクティックの月刊新聞を自費出版。さらに、業界人にめずらしい国際感覚の持ち主だった。特に55才の時（1961年）世界旅行をしてから、今後はカイロプラクティックも世界を視野に入れる必要性を痛感。1964年次男がナショナル大留学、65年ナショナル大学ジェンシー学長招聘へと続く。専属の通訳を抱え、外国のカイロプラクターとの交流を熱心に行ない、海外のカイロニュースを新聞によって日本の業者に伝えようとした。はにかみやの裏に隠された信念の人。当時、めずらしい国際人だった。

松本茂と竹谷内米雄の両氏は全療協の役員としてカイロプラクティックの普及と法制化の為に闘った。1964年（昭和39年）、既得権者のみ終生営業許可が下りたが今後の取り扱いについては中央審議会に諮問された。カイロプラクティックに反対する団体で構成される中央審議会では、「カイロは価値がない」「カイロはあんまの一部である」。日本医師会代表はアメリカ医師会から取り寄せたカイロを中傷・誹謗する資料を提出（後にこの資料はアメリカで裁判になりアメリカ医師会は敗訴する）し、カイロ反対を強硬に主張する。当時、全療協の宇都宮義真理事長は孤軍奮闘して療術（カイロ）立法化の先頭に立っていた。

松本氏は1971年（昭和46年）、厚生省主催の「カイロの実演会」に参加し、モデルを使って分かり易くその理論と実技を解説。カイロに対する理解を深めることに成功した。

1961年（昭和36年）、全日本カイロプラクティック総連盟が設立され、カイロ界の指導者、松本茂、伊藤緑光、竹谷内米雄の３氏の主宰する団体が参加する大同団結が実現した。初代会長は伊藤緑光氏、２代目会長は松本茂氏の日本カイロ協会推薦の草彅大山氏が選ばれた。３代目には竹谷内米雄氏が就任。その時まではローテーションの会長人事であったが、４代目には若い竹谷内一愿氏が選出され、団体加入制から個人加入制になったのを契機に松本茂氏の日本カイロ協会役員全員は総連から去ることになる。

水面下で、松本氏と竹谷内氏はやはりライバルであった。

Shigeru Matsumoto, Yoneo Takeyachi: Two Rivals Who Fought For A Common Cause

In the postwar period of the 1950's, 60's and 70's, there were two outstanding leaders in Japanese Chiropractic, Shigeru Matsumoto and Yoneo Takeyachi. During this time, there were no prewar D.C.'s who were politically active within the profession.

Matsumoto and Takeyachi were comrades, but at the same time they were rivals. The two leaders had many things in common. their main workplace was Tokyo. Neither had a formal chiropractic education, but both adhered to the practice of chiropractic. Both of them worked very hard for chiropractic legislation and both sent their sons to the U.S.A. for a formal education. However, Matsumoto was the president of the Nippon Association and Takeyachi was the president of Tokyo Chiropractic Association. Matsumoto learned chiropractic from Drs. Osawa and Kodaira. He was a good lecturer as well as a good practitioner, and he taught many students. On the other hand, Takeyachi did not teach nor did he have any formal teacher, but because of his ingenuity he mastered the philosophy and arts to such an extent that many people sought his treatment. He was a prolific writer and published "Chiro-News" and a number of books. He had a vision of promoting Japanese chiropractic with the help of U.S. colleges. It was he who was most enthusiastic about inviting Dr. Janse, President of National College of Chiropractic, to Japan in 1965, for the first ever visit of its kind. His second son, Kazuyoshi, returned with a formal education in chiropractic in 1969; the first graduate to return to Japan in 40 years.

Matsumoto and Takeyachi worked together to establish the Japanese Chiropractic Association in 1961. However, when the young Kazuyoshi Takeyachi was elected president and the coalition was reorganized to the individual membership, Matsumoto and his followers left the JCA. Thus they remained rivals.

戦後初の日本人DC、竹谷内一愿氏帰国

Kazuyoshi Takeyachi : The First Post-War DC Returnd in 1969

1969年４月26日、戦後初めてアメリカで教育を受けたＤＣが帰国した。日本が戦争を始めた1930年代に留学帰朝者が絶えてから、実に40年ぶりに迎える正規なカイロプラクターの帰国であった。

その人は竹谷内一愿（たけやち・かずよし）28歳。総連盟・竹谷内米雄会長の次男で、５年ぶりの帰国であった。

業界の期待は大きかった。現役では唯一正統なカイロ教育を受けた人ということで、当時マンネリ気味だったカイロプラクティック業界に改革の新風を期待する空気が高まった。

事実、発足８年目に入った団体加盟制の総連盟は限界にきていた。団体の指導者ばかりで、頭ばかり大きく実働部隊が無く、若手後継者に魅力ある政策は打ち出せず、またわずかな会費予算で改革を期待するのも無理であった。総連盟で決めたことは団体のリーダー止りで、懇親会が実態であった。

竹谷内米雄会長にとって、次男の帰国は期待と不安の複雑な気持ちであったに違いない。竹谷内一愿氏は総連盟の理事に就任すると同時に、全国各地の講演に招かれ、業界の実態をつぶさに見聞する機会を得る。

当時、めずらしい国際派であった竹谷内会長にとっても、息子の５年の滞米経験の変化は想像しようもなく、業界に関して親子の意見はよく衝突した。世代交替を認めつつも父として不安があった。竹谷内一愿は若手後継者に魅力ある業界作りこそ最優先課題と考え、現状維持に満足するのでなく、組織改革を通して将来の展望を開く必要性を説いた。

竹谷内米雄氏は３人の息子に恵まれ、長男・宏明氏は整形外科医、三男・伸佳氏はレントゲン専門家であったが、その後アメリカに留学、兄弟３人ともＤＣという恵まれた環境を得ることになる。これには父・米雄氏の影響が大きかった。

1969年、米国卒業当時の竹谷内米雄（右）と一愿（左）親子
From Lt. Kazuyoshi and Yoneo Takeyachi

竹谷内兄弟。左から伸佳、宏明、一愿
Three sons succeeded to their father, Yoneo
From Lt. Nobuyoshi, Hiroaki, Kazuyoshi 1979

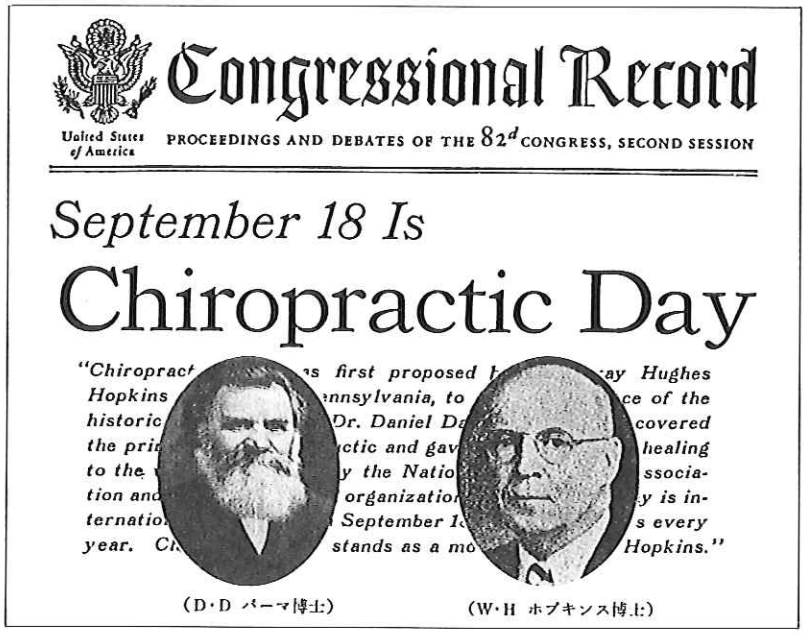
東京カイロプラクティック協会がカイロデーを主催

Tokyo Chiropractic Association Sponsored Chiro-Day Since 1953

「カイロプラクティックを親しみのもてる、大衆のものにしたい」と竹谷内米雄氏は考えた。カイロデーはその絶好な機会であった。DDパーマーの業績を称え、理解ある同志が集まってその輪を大きくしていく。しかも国際サークルの一環として。

1952年ペンシルバニア・カイロ協会会長W・H・ホプキンスの世界的な呼びかけに応じ、竹谷内米雄氏の主催する東京カイロ協会は1953年以来毎年9月18日のカイロデーを祝う。

Yoneo Takeyachi sponsored Chiropractic Day celebration started by W.H.Hopkins, D.C. in U.S.A. Sine 1953.



Congressional Record

United States of America

PROCEEDINGS AND DEBATES OF THE 82d CONGRESS, SECOND SESSION

September 18 Is

Chiropractic Day

"Chiropract ... s first proposed ... ay Hughes Hopkins ... nnsylvania, to ... ce of the historic ... Dr. Daniel D ... covered the pri ... ctic and gav ... healing to the ... y the Natio ... ssocia-tion and ... organizatio ... y is in-ternatio ... September 1 ... s every year. C ... stands as a mo ... Hopkins."

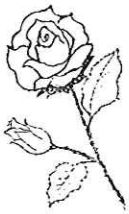
(D・D パーマ博士)　(W・H ホプキンス博士)

日本カイロ総連盟(JCA)、カイロデーを統一主催

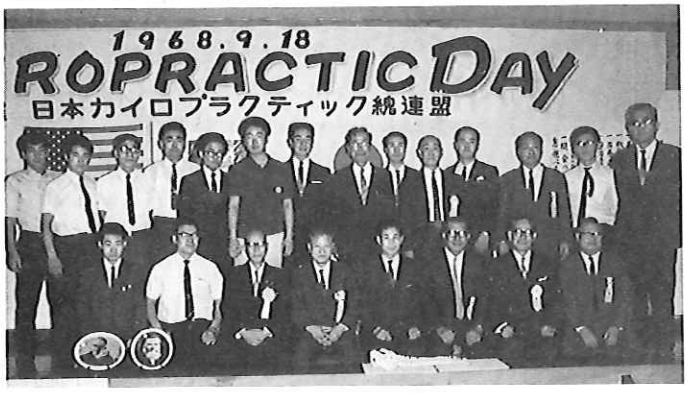
Chiropractic Day : Big Success under the Newly Formed JCA

1968年（昭和43年）9月15日、東京芝の増上寺においてカイロ界統合のカイロデーが開かれた。祝典に先立ち、研修部がテクニックのデモンストレーションを披露。正面の大きなカイロデーの垂れ幕が雰囲気を盛り上げる。午前中の実技披露が終了する頃には全国から150人以上の参会者が集まった。祝電披露、役員と来賓挨拶と続く。治療体験談が述べられた後、懇親会に移った。林家三平、三遊亭金馬師匠などに続き参会者有志も飛び入りし、カイロデーの祝典は最高潮を迎えた。

1968



◀林家三平師匠



1969

1969年（昭和44年）9月14日、東京都勤労福祉会館で総連盟統一の第2回カイロプラクティック・デーが開かれた。U字型に並べられたテーブルには祝膳が用意された。物故者への黙祷の後、日米両国国歌が厳粛の内に吹奏された。挨拶に立った保坂岳史氏は、カイロプラクティックは自由の国アメリカでも幾多の苦難を経て今日がある。1951年米国議会はＤＤパーマー先生の偉業を認め、それ以来カイロデーが祝われるようになった。竹谷内会長は、日本における法制化の前途はなお多くの波乱を含んでおり、一層の団結が要望されます、と語った。業界の先輩方の祝辞が相次ぎ、その後にぎやかな祝宴に移った。